

平成 20 年度喜多方市小学校農業科シンポジウム
基調講演「喜多方市小学校農業科の意義」の概要

講師 宮城学院女子大学 教授 佐藤幸也先生

1 精神性が高く大義を大切にする喜多方

喜多方は大きな歴史的転換期において「大義」を大切にし、筋を通して必ず立ち上がってきた地域であり、当時の権力に対して「大義」を唱えた地域でもあります。江戸時代の山崎闇斎や佐藤一斎などの日本の良心とも言える陽明学が根つき、それが受け継がれ、明治初期には厳しい弾圧を受けながらも自由民権運動に立ち上がりました。

そのような厳しい状況の中、喜多方は明治5年の学制発布と同時に、新しい未来を築く子どもたちのために自分たちの手で真っ先に学校を作り始めた地域の一つでもあり、喜多方の多くの学校はすでに百年以上の歴史をもっています。喜多方を含め会津は、明治維新軍に様々な意味で苦しめられたにもかかわらず、当時の喜多方の人々はなけなしの米をもち寄り村の財産をもち出して、子どもたちや自分たちの未来を託すために、学びの場をつくりそこで学習し合うという伝統を築いてきたわけです。

やがて、会津三方道路などを含め様々な問題が起こり、明治維新が期待していたようなものではなく、全国の農民や人々を苦しめるようになった時、「それはおかしい」と弾正ヶ原で立ち上がり、喜多方事件として今も語り継がれているわけです。あれから百数十年、この間にも蓮沼門三先生や瓜生岩子先生などが全国に苦しみや悲しみがあふれている時に、「私たちにできることがある」と立ち上がり人々のために行動を起こしています。

このように喜多方は、自分たちの手で「世の中を良くしよう」という教えを守り貫こうとする精神性の高さをもっている地域であるというのが私の喜多方に対するイメージです。

2 人間の豊かさを育んできた喜多方

白井市長さんのリーダーシップのもと喜多方市小学校農業科が開始されましたが、私自身もずっとやりたいと思ってきました。

明治の初期から大正デモクラシー期、そして昭和初期にかけて、郷土教育や生活綴方運動が盛んになり、人が人らしくあるための教育が全国で行われてきました。

それよりもずっと前、織田信長の時代から日本には「子は天からの授かりもの」という美しい言葉があり、日本ほど子どもを大切に、子どもを核とした村づくりを進めてきた社会は世界中のどこを探しても見当たりません。明治11年イザベラバードが会津から大峠を通り置賜地方へぬけた際に目にした農村の風景の中には、子どもを大切にしながら豊かに生きる人々の暮らしがあり、その人々の様子や農業の素晴らしさを「東洋

のアルカディア」という言葉で表現しています。

先ほど「冬・水・田んぼ」(注釈：普通の田んぼでは、機械で田を耕してから水を張り、田植えをしますが、「冬・水・田んぼ」は耕さないで冬に水を田んぼに張り、水の中に棲むミミズなどの土壌動物やたくさんの菌たちが冬の間から土を耕し、機械で代かきするよりも柔らかい土にしてくれます。)を見て来ましたが、私の住む大崎の近くの伊豆沼等もこの「冬水田んぼ」を基本として、農業と渡り鳥の共存の取り組みを進め、昨年の9月にユネスコのラムサール条約に登録可能になりました。

実はこの環境保全型農業である「冬・水・田んぼ」は私たちが考え出したものではありません。この取り組みを初めて書物に書き表したのが江戸時代に書かれた会津農書であり、体系化して地域で実践したのがこの会津なのです。それを学んで宮城で実践したわけなのです。

3 小学校農業科の中に見えてくる 今求められる教育

昨年の3月に告示された新学習指導要領では、21世紀日本再生のために、活用型・探究型学習が一層教育現場に求められようになりました。それは、小学校農業科で行われているような実践こそが、各教科で行われている知識や技能の確実な定着に結びついていくことになるからです。

また、これまでのような画一的・一方的な注入型のものではなく、人間としての知性や分別等の本来人間がもつべき「人間力」とも言えるものを形づくっていくためには、学習形態の転換も重要になってきます。そのためには、学校だけに任せるのではなく、家庭教育や社会教育の分野の力を結集し学社融合を図りながら、子どもたちを地域あげて温かい眼差しで育てていくことが大切だと思います。

さらに、その眼差しが学校教育を豊かにし、そのネットワークの中で育つからこそ、子どもたちがふるさとを好きになり、ふるさとを愛する心をもつようになるのです。

「私を心配してくれる人」「私に優しく教えてくれる人」「ふるさと喜多方にこのように誇れる人々がたくさんいる」ということが子どもたちの精神的支えになっていくのです。

このように、小学校農業科の中には様々な教育の素材があるのです。

4 カムバックサーモン計画

私もかつて農業高校に勤務していましたが、外に出ると生徒がいつもうつむいて歩いていました。これは偏差値教育の弊害であり、私自身も何度も悔しい思いをしました。進学校からの誘いもありましたし、私自身も行ってみたいという気持ちがありました。しかし、小・中学校時代傷つき自分の力を出し切れなかった生徒や何らかの事情で農業高校に来ざるを得なかった生徒たちをおいてはいけませんでした。

私たちの世代は農家の長男・長女の場合は、どんなに成績がよくとも地元の農業高校に進み、宿命として村に残って農家を頑張らなければならないと考えていました。そし

て、農家をやるのだったら幸せにならなければならない。そのためには、一人では幸せになれないと考え、農協の青年部として4Hクラブでみんなで頑張ってきました。「技術研修だけではだめだ」「農民には文化も必要だ」と言って家の光を読んだり演劇をしたり合唱をしたりして、自分たちの暮らしを豊かにしてきました。このように私の同級生も頑張ってきました。

そのようなわけで、私は岩手県に永住したいという気持ちもありましたが、同級生も頑張っていましたし、田んぼが五町ある農家の息子として少しでも地域の方に恩返しをしたいと思い宮城に戻ってきました。

このようなことを私は「カムバックサーモン計画」と呼んでいます。農業科で育った子どもたちが、より大きくなるためにいったん外に出て行き、戻って来るチャンスがある大人は、最後の人生はみんなのいる喜多方に戻ってくる。あるいは次の世代のために、素敵な喜多方にするために仲間の力を結集する。実は農業にはこのような素晴らしい力があると私は信じています。

5 学校教育における農業の取り扱いの変遷

農業にはこのような素晴らしい力があるにもかかわらず、1970年代から学習指導要領からは、次々と農業の学習が減らされていきました。昭和43年には国内の農林水産業についてはきちっと勉強することになっていたものが、昭和47・48年には林業なんかやらなくていいことになり、それから10年後には農業か水産業のどちらかだけやればいいということになりました。平成元年の中学校の学習指導要領には「農業」という文字が消えてしまいました。高校の政治経済の教科書でも「農業」ではなく「農業問題」という取り扱いになってしまっています。

農業の尊さや誇り、日本の農民がもつ世界最高水準技術、生き物と寄り添いながら生きてきた伝統と文化があるにもかかわらず、学習指導要領や教科書上の扱いは次第に隅の方に追いやられているのが現状です。

このような状況の中で、総合的な学習の時間に何とか「農」を特設することができるようになり、ぎりぎり学校教育の中に農業が残り、私自身も農業を取り入れた教育プログラムの作成にいろいろ関わってきました。

また、農林省と文部省が連携して、国民の暮らしや文化を守る観点から国民的な農業学習運動を展開することになり、各地の農政局が総合的な学習の時間の農業体験活動を支援することになりました。東北地方では小学校の90%、中学校の70%で農業に取り組むという結果になりました。

都市部の埼玉県や東京の武蔵野市の小学生も長野や岩手、岐阜等に出かけて行き、農村滞在型の農業体験に取り組み、農業の素晴らしさや苦しさ、悲しさ、それを乗り越えてきた農民の力強さ、農作業の後の一杯の水を飲むことの喜びなどを体験することができました。

6 水の恵みを支える農業

水ということで一つお話をさせていただきますと、私の大学のある仙台は 70 km離れた七ヶ宿のダムから水をひっぱってきて、いろいろなバクテリアに水をきれいにさせ、塩素を入れて飲み水としてやっと思えるようにしています。

それに対して、喜多方のみなさんはこれほどおいしい水を（喜多方の水を飲みながら）ふんだんに手に入れることができます。こういうことはなかなかありません。国内を見ても、秋田県の六郷町、飛騨高山の吉川町、米子、松江、福井の大野など、ごく限られた地域の人しか手に入れることができません。

このようにまさに命の水をふんだんに飲むことができるのは、飯豊山系に集っているみなさんが山の手入れをし、田や畑を守ってきたからこそ、このおいしい水を飲むことができるのです。この水の文化は、先祖から受け継いできた喜多方の最高の贈り物だと思います。

世界的にみると、数十億の人々が水に困っている中、このミネラルたっぷりの水によって私たちは美しく育つとともに、この水によっておいしいお米や作物が育っているのです。この水の恵みというものを私たち大人は、意図的に意識的にきちんと子どもたちに伝えていかなければなりません。さらに、子どもたち自身が誇りをもって、この水のことをほかの人たちに伝えていくことが、喜多方市小学校農業科の一つの意義ではないのかなと考えています。

7 喜多方市小学校が注目される理由

会津の方々はお金の話をしますと嫌がられるかもしれませんが、この小学校農業科が様々な新聞や雑誌に取り上げられています。この前出たばかりの本の巻頭言でも J T の中村桂子さんが喜多方市小学校農業科のことを紹介しています。

これらのことを総合して、その宣伝効果を考えると 10 億円は下らないだろうと思います。お金の例えでしたが、それぐらい全国各地のみなさんが、この喜多方の取組みを熱い期待をもって注目しているという事実が重いのです。総合的な学習の時間は 1 時間減らされることになっていますが、喜多方市と同じような先進的な取組みが全国で行われています。

例えば、愛知県西尾市の寺津小学校や寺津中学校、高知県南国市の後免野田小学校は素晴らしい取組みをしています、1 つの点に過ぎません。

喜多方の地域をあげて、子どもたちを核に地域の人々が結集して、あらためて農村やその暮らしぶりを考えてみようという三次元のレベルにまで高まった取組みをしている地域は、日本全国ほとんど見かけることはできません。

隣の山形県の高畠町の二井宿小学校も大変素晴らしい実践をしていますが、高畠町は全域でやっているわけではありません。置賜農業高校も頑張っていますので、本来は置

賜地方全部をあげてやって欲しいのです。JAのアグリスクールも頑張っていますが、喜多方市のように市をあげて、それ以上に農業科支援員のような地域の方々が「今こ子どもたちのためにおれたちの出番が来たんだ」と頑張っているところは他にはないのです。

しかし、それはやっていないだけで、やりたいと思っている方は日本全国にたくさんおいでになります。そういう方々が、ますます「私たちもやりたい」という憧れと希望をもって喜多方を見ているのです。

8 つくりだされた農業の危機

我が国は子どもたちだけでなく、国家社会として限界点に達しています。

限界集落だとか様々な農村、農業の危機だとか言われていますが、私はそれをつくりだされた危機だと考えています。

農民は諦めている訳はありません。限界集落と言っていますが、そこから人々がいなくなっているわけではありません。みんなそこで一生懸命頑張っているのです。それを簡単に限界集落などと言って欲しくないのです。

しかし、そういう頑張っているみなさんは少数派になりつつあります。この東北地方には約一千万人の人々が生活しています。そのうち、約200万人の人々が直接農業にかかわっています。さらに日本の農業は限界だと言っていますが、500兆円という世界第2位のGDPを稼ぎ出している日本の国内生産額970兆円のうち、農水省の試算では約100兆円を農業・食料関連産業が占めているということを考えれば、どこが衰退産業でどこが消えゆく産業なのかということを知りたいのです。

日本の農業の素生産から関連産業を含めるとヨーロッパ数カ国分の経済力があります。アジア、アフリカの諸国と比べると数十カ国分の経済力があります。それだけの強いけん引力をもっているのです。しかも、この狭い耕地で気象条件の厳しい中で、これだけの生産量をあげている。アメリカやオーストラリアのように広大な大地でやっている農業とは違って、1本1本の苗の張りに、土の色に気を配りながら、これだけの産業に育て上げてきたのです。どこが衰退産業なのか、まさに世界をけん引してきたリーディング産業なのです。

9 大量に食材を捨てる日本人

それにもかかわらず、膨大な量の食物が輸入されています。

その結果、保護者世代でも刺身は切り身で泳いでいると思っている人もいます。私が教えている大学の管理栄養士を目指す学生の中にも、米と麦の区別がつかない学生がいます。ハウレン草の旬は夏だと思っている学生がほとんどで、正確に冬だと答えられる学生はほんのわずかしきません。米は太ると信じている学生もいます。

日本人は、口では「安心・安全は国産よね」と言います。しかし、スーパーなどでア

アメリカ産や中国産のものを目にするると圧倒的にそちらを購入してしまうという消費者が存在するという事実があります。

そのことが実は日本の農業生産者をここまで追い詰めてきました。

そして、安いからという理由でアメリカ産や中国産のブロッコリー等の野菜を大量に買って、家庭ごみの60%を占める割合でその食材を捨ててしまっています。年間に1100万トン捨てられています。日本は世界各地から約2000万トン輸入しています。面積に直すと約1200万ha、現在の日本の農地の3倍ぐらいのところから輸入をする一方で、3000万人分の食料を捨てています。

誰がこれを捨てているのか、農家の人はもったいないあるいは罰が当たるという倫理観がありますから捨てません。安く大量に簡便に買った人は捨てられるのです。1日当たり660kcal、コンビニやレストランでは約550万トン、農林水産業の生産額が12兆円なのに対して年間11兆円分が廃棄されているのです。

そういう国民をつくってしまったという責任は重く、私たちはその責任の一端を担わなければならないのです。

まったく分からないままに育ってきた30代から40代前半の人たちに、このことを分かれと言っても極めて難しいことなのです。

だから、子どもたちが農業科を学ぶことが、その親を育てる重要なきっかけになるのではないかと思います。そして、そういうことに関心をもっている全国各地の人たちも、このように勉強すれば命を大切にする倫理観や道徳観を身につけことができるようになると思うのではないのでしょうか。白菜1枚といえども命がある。それを簡単に捨てる。だからこそ動物の命も奪い、場合によっては人の命も奪うということになるのではないのでしょうか。

10 喜多方の人々の品格

日本は、これまで頑張ってきたにもかかわらず世界で一番自殺者の多い国になってしまいました。

秋田に私の大好きなJA秋田やまもとというところがありますが、ここは自殺率が日本で一番多いのです。ここのJAの女性部の人たちが頑張らなかつたら、もっともっと自殺者が増えていると思います。

JA最上町も山形県内で最も自殺者の多いところですが、ここの青年部の人たちが頑張って米粉パンの開発に取り組んでいます。そして、町の中に希望を取り戻しています。会社が倒産して失業しても、これから農業を基盤として人生をもう一回やり直すと言って頑張っている人たちもいます。繰返し新たな命が生まれてくる農業によって、私たちも新たな希望を取り戻すことができるのです。農から自分の命をやり直すことができるのです。

そして、すべての命や暮らしを大切にする。科学技術もお金儲けも、本当は人々の幸

せに結びつくものでなければ、悪魔の道具になってしまいます。

これが本来の日本人の品格であり分別ではなかったかと思います。喜多方に来るたびに、そういう確かな日本人の品性、品格が感じられます。私の岩手の人々の優しさが大好きなのですが、その人への優しさは貧しさや苦しさを分かち合う分別だと思っています。

11 アウトソーシングと農村における教育

現在、日本は幼児の時代からいろいろな塾に行き、習い事をしています。これを私は命のアウトソーシング(外部委託)と呼んでいます。これまで母親だけに子育てをしろと言ってきた面も確かにあります。だからつらいのです。子育ては地域で分かち合うはずのものでした。昭和 40 年代ごろまでは、そういう考え方が会津にも日本にもあったはずです。会津では今も受け継がれているかもしれませんが。

私のところにもそういうものがありました。春や秋には掘りはらいがあり、山の方までずっと行って水の取り入れ口から堰沿いにひら場まで 30 km も 40 km も村人総出で雑草や流木を取り、きれいな川の水を取り戻すことを一緒にやってきました。その中で私自身も、村の中で生きている、育てられているということを感じてきました。

12 食の自立

現在の格差社会の最大のポイントは意欲の減退です。南アフリカでスティーヴン・ビーコウスやネルソン・マンデラがアパルトヘイトと戦った時、黒人に訴えたのは、「黒人は劣っているから白人に支配される」と黒人自らが自分を卑下し誇りを失っているから、このような差別が永続するのだということでした。同じテーブルに着くためには、人間としての誇りや喜び、希望を自らの手で見出し、子どもたちに語らなければいつまでたっても黒人は奴隷のようなみじめな生活しかできないと言ったわけです。

私たち日本人はあたかもどこかの国の植民地にされ、それらの国の食べ物を受け入れ、莫大なコマーシャル経費を使って、食の多様化や西洋化などと思い込まされてきました。これは明らかな間違いです。

あるおばあちゃんが孫のためにおやつを作っても見向きもされないと涙ながらに話してくれました。孫も嫁も可愛いものだけれど、つらいということでした。

なぜこういう世代が生まれてしまったのでしょうか。これを取り戻すことはできないのでしょうか。そう思われた時に喜多方の農業科がありました。

日本ではおいしい果物がたくさん生産されていますが、今の学生は果物を取らなくなり、以前と比べて 30% 減少しています。当然リンゴをむくことさえできない学生が多くみられます。カットフードなど手軽な外国産のものにばかり目が向けられ、食を通した植民地化が図られているといった状態です。

学生の食生活の調査のからもその傾向は見られます。そのような中、3世代同居の中で大きくなった学生がいて、小さい頃から家庭料理をしっかりと食べ、お母さんやおばあちゃんの料理のつくり方を見て育ってきました。その学生は自炊生活をして、しっかりと食事を作って食べているのです。小さい頃から家庭料理で育ったことによって、生活の自立の基本である食の自立がしっかりとできるようになったのです。

小学校農業科は、子どもたちが自分たちで育てたものを食べることを通して、日本の食文化や食生活の素晴らしさを学び、それに対する誇りを育てます。また、そのことに家族や地域の方々が深くかかわることによって、地域の伝統文化を子どもたちが受け継ぐことにもなるのです。

13 おわりに

農業や食、家庭や地域の教育力など様々な問題が持ち上がっている今、喜多方のみなさんが未来を担う子どもたちへの熱い思いをもって、小学校農業科に取り組まれています。そして、この農業科を学ぶ意義は大きく、今までお話しさせていただいたように様々な面に効果があります。この農業科を通して育った子どもたちがやがてふるさと喜多方を誇り思うと同時に愛しこの喜多方を素晴らしい街にして行ってくれることを信じています。

今こそ、真の教育をこの喜多方から始めましょう。